

特集

【山】 mountains

低山ハイキング

低山ハイカー

標高1000m前後の低山を日帰りで登るのが好きです。山行そのものに加えて、富士山を見ることが楽しみなので、必然的に山梨県および神奈川県西部の山が多くなります。静かな山が好みですので、高尾山のような人気の山はあまり行きません。帰宅の足は以前は電車でしたが、座って帰れるマイカーが圧倒的に楽なことに気づいて以来、付近に駐車場の山に登ることがほとんどです。山梨県大月市にはこの条件を満たす山が多く、一時期は頻繁に登りに行っていました。大月駅付近の駐車場に車を停め、ザックを担いでJR中央本線や富士急行線で最寄りの駅まで移動ということも何度かしました。

早朝に人気のない山道を歩くと、ちょっとした探検気分を味わえます。木のはじけるような音、何かの動物の鳴き声、遠くから聞こえるガサガサ音にドキドキします。目の前にある木の根元の穴から、突然、ウサギのような小動物が飛び出して、ものすごい速さで駆け去っていったときは、本当に驚きました。登り道が一段落して平地に出たら、タヌキがこちらを見つめていて、ほっこりしたこともありました。

暖かい季節の低山は虫が多いので、登るなら秋か冬がおすすです。富士山の眺望を楽しむなら、空気が澄んでいる12月から1月がよいでしょう。山梨県の高川山はいろいろなルートで登ることができ、1時間から1時間半ほどで登頂できるうえ、富士山の眺望は抜群という素晴らしい山です。最寄り駅は中央本線の初狩駅か、富士急行線の田野倉駅です。頂上は狭いのでくつろぐには向きませんが、そこからの眺めは一見の価値ありです。



地元で愛される山

みかん

私の生まれ育った岐阜市のシンボルは金華山です。実は戦国時代の表舞台にも度々登場する、歴史ある山で、山の上にそびえたつ「岐阜城」はかの有名な戦国武将、織田信長も居城とした場所です。山頂にある展望台からはふもとを流れる長良川や彼方まで広がる濃尾平野を見渡すことができます。金華山の標高は329m、本格的な登山！という感じではありませんが、山頂まで1時間程度で辿り着くので気軽な山登りにはちょうどよいです。私も小学生の頃の遠足や家族、友達との行楽で、かれこれ10回くらいは登っていますし、岐阜市民なら誰でも1度は登ったことがあるのではないのでしょうか。そのくらい、地元の人には馴染み深い山です。

金華山には初心者向けから上級者向けまで合計10コースの登山コースが用意されています。ゆるやかで急な坂道がなく3歳児でも登れるという七曲り(ななまがり)や、尾根沿いを登り、険しい道が続く百曲がり(ひゃくまがり)、所々に崖や急な箇所はあるけれど眺めがよくて人気の瞑想の小径(めいそうのこみち)、そして1番険しく体力に自信のある人でないと厳しい最短経路の馬の背(うまのせ)など、登る度にコースを変えられるので飽きません。

山頂には岐阜城のほか、リス村や展望レストランがあります。夏は展望レストランでビアガーデンが開かれ、毎年とても人気です。特に、長良川の花火大会が開催される日はビールとBBQを楽しみつつ、山頂からゆったりと花火が見られるので予約困難だそうです。

実は、金華山にはロープウェイがあるのであつという間(約3分)に山頂までたどり着くこともできるのですが、私としてはのんびり景色や山の空気を楽しみながら自分の足で登るのがおすすです！





山で食べる

たかやなぎ

みなさまは登山といったらどのようなものを想像しますでしょうか？私は比較的ライトな登り手であるため、あまり難易度の高い山には登り(登れ?)ませんが、その分様々なタイプの山を楽しんでいます。例えば、比較的手軽に登れる高尾山から、少しだけ登るのに苦勞する奥多摩の山々、あとは富士山などでしょうか。

登る山の難易度やタイプによって楽しみ方は変わってくると思いますしひとそれぞれかと思いますが、私の場合は黙々と目の前の傾斜を登ること自体も好きなのはもちろんのこと、それ以上に「山の上で仲間と何かを食べる」という行為が好きです。今までで言えば、ガスコンロと鍋を担いでいって豚汁を作ったり、チーズフォンデュをしたり、参加者各々がイングリッシュマフィンの手作り具材を用意してきて、どれが一番マフィンと合うか対決したり…などなど、それって山の上でなくてもいいのではないかと思われても仕方ありませんが、これがやめられない。むしろ山の上だからさらに楽しさが引き立つのではないかなと私は思っています。

仲間とアイデアを持ち寄りながら企画を出し合い、少し工夫するだけでも山の上の解放感や登頂の達成感なども相まって本当に心地よい空間となり、登ってきて本当によかったな！という気持ちにさせられます。登山というテーマなのに食べてばかりじゃないかと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、個人的にはこれが、また登りたくなる最大の理由なのかもしれません。

山に登るには本当にいい時期になって来ています。みなさまも気心の知れた仲間と登山をして、美味しいものを食べながら山頂で語らうというのもいいかもしれません。



畏怖の空間

かしこまり

山は不思議な場所です。昔から、自然界の様々なものや現象が人々に崇められていますが、日本では、山はその代表的なものといえます。多くの山は自然の恵みを提供して、人間の生活と深く関わりながら、親しみと崇拝の念を向けられてきました。そして、今我々が山に入り、人工物が全く目に入らない場所に身を置いた場合にも、大きな存在を前にして畏まった気持ちに満たされます。

我々の身近にあり、かつ人智を越えた領域として、山の中で不思議な体験をした人の話は数多くあります。人がいるはずのない場所で声が聞こえたり、気配を感じたり。あるべきものが見えなかったり、ないはずのものが見えたり。JR東日本の刊行物「トランヴェール」6月号でも、田中康弘氏の『山怪』を取り上げながら、山での不思議な体験を紹介しています。山は神聖で畏れの多い空間として、昔から人間界の常識を超えた不思議なことが起こり得る場所と考えられていました。それゆえ、宮崎アニメ等で描かれる山での不思議な出来事も、比較的容易に受け入れられるのだと思います。

海でも不思議な話がありますし、その奥深さを感じることも多く、また、実際に荒れた海に出ていると生命の危険を感じて恐怖を覚えることはあります。しかし、山はまた特有の畏怖の気持ちが湧くところであり、特に荒天でなくとも、畏れに近い感覚が芽生えます。それは、海などで感じる怖さとは別の、もっとじわじわと感じる大きな力、自分よりはるかに大きな存在の中に今自分がいるという実感が静かな重みとして際立ち、より謙虚な気持ちに包まれるのだと思います。上記した「トランヴェール」6月号では、「怖いものがあるというのはいいことだ」という老マタギの言葉を記していますが、臆病な私は、自分が山で臆病になり過ぎることを省みつつも、この言葉に納得し、安堵させられるのです。